

写真記録

『核被災に向き合う
高校生たち』出版

澤野重男

本書は、一九八〇年代から現在まで、ほぼ四〇年間、核被災に向き合ってきた高知県・幡多高校生ゼミナールの写真記録である。

冒頭、序「幡多高校生ゼミナールの歩み」が幡多ゼミの歴史を概説する。写真記録はⅠ「ビキニ事件を追う高校生たち」とⅡ「核被災を学び合う高校生たち」の二部構成で、その間に幡多ゼミの高校生と教師たちの報告「ビキニ事件の真実」がある。

「ビキニ事件を追う高校生たち」では、長崎で被爆し、

ビキニ水爆実験に遭遇した「二重被ばく者」藤井節也さんの青春と死、それと出会う高校生たちの姿がまず記録される。「足元から平和と青春を見つめよう」と、彼らはビキニ被災漁船員のいる港を歩き、調査する。船着き場にし

ゃがみ込み、集会所で漁民を囲み、各家庭を訪問して、聞き取り調査を進める高校生たち。彼らの真剣なまなざし、表情が美しい。そして、核被災船・住吉丸の発見。高校生たちは第五福竜丸を追って東京へ。二つの被爆地広島・長崎へ。全国高校生平和集会では「第五福竜丸だけではない。全国で一〇〇隻以上のビキニ被災船があった」と報告。さらに沖縄へ、韓国へと調査活動が広がる。映画「ビキニの海は忘れない」（森康行監督）が製作される。マスコミ

の解明がすすむ。学校と社会の協力で高校生は成長する。

幡多ゼミの卒業生で特別支援学校の教員として活躍する小川珠代さんの報告がある。「幡多ゼミで、仲間や先生と

一緒に、戦争やビキニ事件の聞き取りをしながら、同時に、自分はこれからどう生きていくのか、自分探しをしていたのだと思います」。幡多ゼミの活動は、高校生の自主活動、部落研や平和ゼミの活動につながる。地域に根ざし、平和・人権・民主主義のために「学び、調べ、表現する」活動だ。幡多ゼミの活動は、子どもの権利条約の先駆的実践であり、高校生が社会参加し、一八歳選挙権の担い手にふさわしい人間的力量を持つことを証明した。

「核被災を学ぶ合う高校生たち」では、東日本大震災にともなう原発事故とそれ以後の「福島」との出会い。核被災をテーマにした「福島集会」

核兵器禁止条約」の製作などが記録されている。

二〇二一年一月二二日に発効した核兵器禁止条約に、日本政府は否定的である。同年八月八日の全国高校生平和集会は、政府に条約への署名批准を求める署名運動を提起。DVDの製作・普及活動で幡多ゼミは運動に貢献する。

幡多ゼミの高校生たちのビキニ調査は被災漁民の心を開いた。初めは「一切話したくない」と思っていた漁民が、「損得もなく」「何回も来てくれる」「高校生に心をうたれて、「口を開こうか」という気持ちに変わる。青春を輝いて生きる高校生たちは、ビキニ被災漁民たちを励まし、証言活動を前進させ、「ビキニ事件の真実」を明らかにした。ビキニ被ばくの労災申請訴訟を後押しした。そして高校生たちもまた、漁船員たちとの交流を通して、自らの生き方や進路を学ぶのである。

「あとがき」に、「この本の出版を後押ししたのは『核兵器禁止条約』の発効であった」

とある。「ビキニ被災者の死亡や病状の深刻化に寄り添いながら、事件の実相を記録していくという厳しい活動の積み重ねであった」とある。死んでいったヒバクシャたちにはもう会えないが、この本を見れば、奈路広ら写真家のファインダーがとらえたヒバクシャに会える。高校生に会える。ヒバクシャと高校生がつくる希望の未来を見る

ことができる。核兵器禁止条約に希望をつなぐ人たちに、この本を見て欲しい。核被害をなくそう。社会は変えられる。世界史ではつくることのできるのだ。とりわけ、何とも知れない未来に希望を見出すことができている若者たちと彼らのそばにいる大人たちに、この本を見て欲しい。この本は高価だから読まれないというのでは残念だ。学校や地域の図書館、公民館や集会所に置いて、みんなで見てもらいたい。（さわのしげお／広島高校生平和ゼミナール世話人／平和・国際教育研究会事務局次長／せこへい（世界の子どもの平和像）美術館代表）



A4判変型一六八頁、一五〇〇〇円